10 不活化ワクチン

Hib（インフルエンザ菌b型）

Hib（インフルエンザ菌b型）って、なあに？

インフルエンザ菌は子供の化膿性髄膜炎や敗血症を起こす菌のうちで一番頻度が高いものです。インフルエンザ菌は菌の外側にある莢膜の抗原性によってa～fまで6つの血清型がありますが、日常、感染症を起こすのはb型菌と、莢膜のない菌です。b型菌は小児の敗血症、化膿性髄膜炎、喉頭蓋炎といった侵襲性感染症と肺炎、中耳炎等の粘膜を中心とした感染症を起こします。この菌は通常生活をしている範囲のどこにでも存在しますし、菌を鼻腔やのどに保菌している人もいるため、咳やくしゃみなどによる飛沫によっても感染します。通常5歳までには感染し抵抗力ができますので、5歳未満の乳幼児の感染がほとんどです。

日本では毎年約600名の乳幼児が発病します。感染の初期は風邪と同じ症状で、診断が難しく、侵襲性感染症を発病してから診断されることが多く、特に髄膜炎の発症は、5歳未満の小児人口10万人あたり8.6～8.9人と報告されています。感染者の約30%が予後不良と推計されています。最近では治療に使う抗生物質に対する耐性菌が増えており、ますますワクチンで早く免疫をつけておく必要性がでてきています。

欧米ではワクチン導入後、Hib感染症は劇的に減少しており米国全体でも6～7名の発症になっています。WHOは1998年3月に乳幼児への定期接種を勧告しており、世界110カ国以上で導入されています。

●❶標準的な接種日

Hibワクチン接種 1回目　月　日
↓ 4～8週間
Hibワクチン接種 2回目　月　日
↓ 4～8週間
Hibワクチン接種 3回目　月　日
↓ 約1年
Hibワクチン接種 4回目　月　日

●❷の場合の接種日

（生後7～12カ月未満）
Hibワクチン接種 1回目　月　日
↓ 4～8週間
Hibワクチン接種 2回目　月　日
↓ 約1年
Hibワクチン接種 3回目　月　日

（1～5歳未満）
Hibワクチン接種 1回目　月　日

接種を受ける時期と間隔は？

Hibに対する免疫力は母親の移行免疫抗体で生後2カ月頃までは守られていますが、それ以降免疫力は消失します。Hib感染症は、ほとんどが生後3カ月～4歳までに発症しますので、生後2カ月以後からのHibワクチンの接種が効果的です。

●対象者年齢：生後2～60カ月未満

❶ 標準的な接種方法

［初回接種］

●接種開始年齢

生後2～7カ月未満

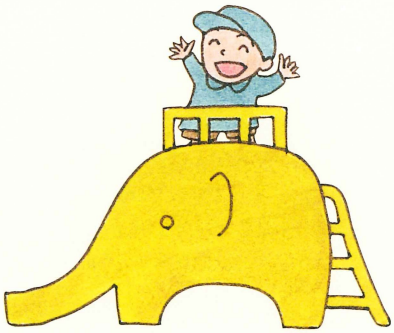
●回数

4～8週間間隔で3回の皮下注射

※ただし医師が必要と認めた場合
　3週間の間隔で接種できる

［追加接種］

通常、初回接種終了後おおむね1年後に1回の追加接種をします。



❷ ❶の期間に接種できなかった場合

年齢的に免疫ができやすくなりますので以下の様な接種方法もあります。かかりつけ医とよくご相談ください。

●接種開始年齢

生後7～12カ月未満

［初回接種］

4～8週間間隔で2回の皮下注射

［追加接種］

通常、初回接種終了後おおむね1年の間隔をおいて1回追加接種

●接種開始年齢

1～5歳未満

1回の皮下注射

Hibワクチンの副反応は？

●ごくまれに腫れや発熱、発疹、じんましん、かゆみなどがみられることがありますが、これらは、通常一時的なもので数日以内に消失します。